

本との出会いを楽しむ 第17回

佐野洋子作『うまれてきた子ども』を読んで

国際連携本部 准教授 サワダ・ハンナ・ジョイ



私は毎年弘前大学で「日本の絵本の世界」と題した科目を開講しています。英語と日本語の二ヶ国語で行うこの授業では、さまざまな国から来日した留学生と日本人学生と一緒に日本の絵本作家の作品について考えます。最初は絵本が幼い子どものための読み物だと思い込んでいる学生が多いようですが、多様な作品を読み解くにつれ自分の体験と重なる物語と出会い、生き方のヒントを発見するケースは少なくありません。外国での暮らしを初めて体験している留学生が特に注目するのは佐野洋子の作品。ここでその中から一冊を紹介させていただきます。

『うまれてきた子ども』の主人公は、生まれなかつたから生まれなかつた子どもです。生まれなかつたから宇宙をさまよっています。ある日、この子どもは地球にやってきました。しかし地球でライオンに吼えられても怖くありませんし蚊に刺されてもかゆくありません。パン屋さんからパンのにおいがしても食べたくありません。子どもは生まれていないから関係ないのです。けれどもある日、子どもが町の広場に座って関係ないものをながめていたら、小さな女の子が犬にかまれるのを目撃します。「いたいよう」とわめく女の子はお母さんに薬をつけてもらい、ばんそうこうを貼ってもらいます。それを見た生まれなかつた子どもは突然同じようにばんそうこうを貼ってもらいた

くなり、「おかあさん」と叫びながら生まれてきます。その後、パンのにおいをかいだ子どもはむしゃむしゃ食べて、蚊に刺されるとかゆくなり、ばんそうこうを貼ってもらいます。夜になると「ぼくねるよ。うまれているのくたびれるんだ」といってお母さんにおやすみのキスをもらい、ぐっすり眠ります。

この『うまれてきた子ども』の話は異文化体験と重なり合う側面がいくつもあります。母国を離れて暮らすと再び「生まれてくる」ことを強いられます。新しい言語を学ぶことは生まれたばかりの自分にもどって一から言葉を覚えることです。慣れない食べ物を口にし、時には大変痛い思いをすることもあります。生まれてこなかつた子どものように周りの人間を観察し、「自分は関係ない」と思っている方がよほど楽な場合が多々あります。しかし痛い思いをしない限り「ばんそうこう」すなわち他者とのつながりを体験することはできません。この絵本は新しい体験にとまどうものの背中をやさしく押してくれます。生まれてくること、すなわち自分の慣れた環境や領域を離れて世界とかかわりをもつことは、実に「くたびれる」ことです。しかしそこにはかけがえのない発見や出会いが待っているのです。是非『うまれてきた子ども』をご一読ください。

(サワダ ハンナ ジョイ)

当館では、残念ながら佐野洋子氏の絵本は所蔵しておりませんが、他の絵本はいくらか所蔵しています。いろいろ読み比べてみてはいかがでしょうか。ページ数が少ないので、気軽に読めるところも魅力です。絵本の分類番号は 726.6 です。開架より、書庫の方に多く置いてあります。

また、絵本論の分類番号は、019.5 となっています。こちらもどうぞ。